日本中國學會報　第六十九集
二〇一七年十月七日　發行　抜刷

幕末の一儒の載道精神

――伊豫松山藩儒・大原觀山舊藏書考

加藤國安

幕末の一儒の載道精神

――伊豫松山藩儒・大原觀山舊藏書考

加藤國安

はじめに

伊豫松山藩儒・大原觀山（一八一八～一八七五）と聞いても、その名を知る人は稀であろう。本姓は加藤、名は有恆。姉の夫の大原家を嗣いでこう名乗った。というよりも正岡子規の外祖父という方が早い。子規は幼少時よりこの觀山の手ほどきで漢學を學んだ。とりわけ漢詩に興味を覺えた。以後、隨時書きためられたのが自筆の漢詩拔萃集十一種だが、『子規全集』（講談社版）には未收錄のため、この度翻刻作業を行い公刊したところである。[1] その中に子規十五歳時の寫本「觀山遺稿」（法政大學子規文庫藏）がある。これは計一八五首からなるが、觀山の遺稿詩選たる『蕉鹿窩遺稿』[2]（子息・加藤恆忠（拓川）編）「例言」には、「詩凡そ二千餘首、以て家に傳ふ」とあり、子規寫本はその抄本と分かる。では「家に傳ふ」という原本の所在は、またその原貌はどうなっているのか。

そこで『松山市立子規記念博物館（以下、子規博）館藏資料目錄』一（一九八四）で「觀山「詩稿」」とある四點[3]より調査を開始し、次に後裔宅藏本の確認へと範圍を廣げた。その過程で觀山の舊藏書は子規博に長櫃四棹分が寄託されていることが分かり[4]（以下、寄託本への言及は特に斷らない）、さらに後裔宅より六棹分（書籍二棹、軸物四棹）を新發見した（以下、家藏本）。これを機に東北大學狩野文庫藏『觀山文集』（以下、狩野本）も加え、沒後百四十餘年ぶりに觀山舊藏書を再統合する形で初の悉皆調査に着手した。舊藏書は寫本が少なくなく、また家藏本も訪問調査に時間を要するため十全なものではないが、幕末期の日本の岐路を再考する上での未發掘資料として、その調査結果を報告する。

一　松山藩校期―觀山を形成した原點

まず觀山の生涯だが、簡略な事跡なら『蕉鹿窩遺稿』の「觀山先生墓表」（藤野海南著。末弟漸（すすむ）の妻と子規の母が姉妹）や、「觀山大原先生墓誌銘」（幼なじみで松山藩校明教館の同僚・武知五友著）等があるが、その實像を深く理解するには不足である。ことに彼の生涯にとって大きな意味をもった昌平黌時代の委細がほとんど分からない。そこでその作品や關係資料から、その足跡を辿ってみたいと思うが、その前に松山時代の素描をしておく。

觀山は少年期より高い才能を示し、「天下の英才、千萬人の上に傑出する者…、木下順庵は年十三にして…、祇園南海は年十七にして…、熊澤蕃山は年十六にして…、太宰春臺は…年僅かに十五」（藤野海南「大原士行［觀山］の題詠花鳥圖卷に題す」）と、大先哲に竝べて稱贊されるほどだった。家藏本「觀山遺稿　詩」[5]（十五～二十歳の作には、「原本」「寫本」「少年作」と表書された三種がある）を見ると、生來文人肌の氣質が強かったといえる。

一例として菅茶山詩に次韻した「梅花次茶山翁韻」[6]詩があり、「十八九歳作」と頭注される。天保六、七年のことだが、この頃の觀山は「偶成二首」其二（「少年作」本）によると、

我生十有八春秋　嘆息光陰似水流　數載功勞書萬卷
一家歡樂酒千籌　始官鄕國叨衣食　屡侍詩壇辱唱酬
虛過終羞無補世　漫言民苦不曾休

もう十八歳、時の流れは速いもの。この數年勉學に沒頭し、家も樂しく酒もたくさん。初めて徒士二石の身となり、詩壇の仲間に連なっている。世の中の役には立っていないけれども、民の苦しさへの關心はいつも持っている。―このような日々の中にあって、しばし茶山の世界に親しんでいた樣子が窺える。

當時、觀山は文政十七家に強く引かれていた。十九歳作の「書文政十七家集後」[7]にいう（家藏『觀山遺稿　文』卷下、（　）は筆者補）、

元和偃武の後、詩敎日に隆く、薄海の內、大家名家、詩を以て家を名づくる者、彬々として輩出し、代よ其の人乏しからず。是に於いて扶桑千家詩・日本名家詩選等の出づる有り。然れども近世の詩に至りては、則ち未だ選びて集する者有るを聞かず。余毎に之を憾み、竊かに纂輯に志有るも、未だ暇あらず。屬者一友人の許に於いて、藝の加藤氏（淵）の文政十七家集（十七家絕句）を得て之を讀む。海內の詩人を盡くすに非ずと雖も、然れども其の取る所は皆一時の巨擘なり。［然れば則ち盡くするに非ざるも亦た憾まんや。］善き哉、加藤氏の擧なるや、先に我が心の同じうする所を得たりと謂ふべし。天保丙申十一月書す。

中でも觀山は茶山をその領袖格と位置づけていた。そのことは「讀文政十七家限韻」[8]に、「或爭雄麗或精巧　家々風格各不同　文政詩豪十七子　尤推西備老茶翁」（一作「或爭雄麗或清淡　月露風雲模得工　文政詩豪十七子　掣鯨老手是茶翁」）という通りである。それを踏まえた上で「竊かに（近世の詩の）纂輯」も自ら企圖していた。

茶山愛好は作品上の世界に止まらず、じつは身近な存在として意識するものでもあった。そこには明敎館の師・歌原松陽の介在があった。少年期の觀山詩を時系列順に讀むに、「廿一歳ヨリ東都留學中作」の册子になると、松陽を稱して「次松陽岳翁送別韻二首」と「岳翁」と呼ぶに至る。すなわちこの頃松陽の長女重を妻に迎えたからである。この岳父が茶山と親交があった。觀山の隨筆『膾殘錄』（手稿本）[9]にこうある。

○岳翁、茶山を問ふとき、座に諸名家の認し屏風あり。翁其優劣を問ふ。茶山曰、人、亂髮藝服して居れる、其品雜分。衣冠をたゝして廟堂ニ立ハ、其品一見して了すへし。春水、第一たる事是ニて見へし。

この他、「白石、蛻巖、茶山三先生、詩ハ日國の傑出といふへし」「茶山自らいふ、余酒四合を呑されハ事を揮能はす」等とあり、茶山への親愛の念が窺える。また舊藏書には、「諸家文錄」中に「茶山先生行狀」が、さらにかの『黃葉夕陽村舍詩』（ともに寫本）もある。また少年期

の自作漢詩には、陸游の田園詩に和した詩も少なくなく、觀山が穏やかな宋詩風を好んだことを物語る。

松山藩校での觀山は、昌平黌で古賀精里に師事した藩儒日下伯巖からも強い薫陶を受けた。また現實社會への關心についても注目すべき寫本がある。「天保乙未三（一及び四）月寫于直養齋西窓之下」と各々墨書された、順に「室和長田論」（和角維幹・室鳩巣ら）「休否錄引」（西山拙齋）の存することである。直養齋とは觀山の書齋名と解され、天保五六年（觀山十七、八歳）の頃、長田忠致（ただむね）による源義朝殺害の是非をめぐる政論や、寛政の改革等について強い時事的關心を寄せているのであり、後年の硬骨漢の芽をそこに見出すことができる。

さらに付加すれば、天保八年には觀山の養父・大原恆固が、大鹽平八郎の亂の警備のために松山より大坂に派遣されている。歸任した養父から大鹽事件についても聞いていたと思われる。また『膾殘錄』には計六條、大鹽についての記述があるが、中には後年昌平黌期に聞いたかと思われるものもある。「（幕儒・若山）勿堂翁云、大鹽亂をなす前年、歸都の路相見せしか、眼中甚狂ふしく喪心の人の如く見えぬ。云々」や、「某先生、大坂の亂をなせしハ深き志なし、唯やけなりといはれし」である。某先生とは、事件後、大鹽と文通があったことで疑惑の目で見られた佐藤一齋かとも思われる。[10]

二　昌平黌期―「猪突」する「游學生」

少し前後したが、觀山の昌平黌時代について見ていこう。觀山が松山藩校から昌平黌へ遊學したのは、天保九年（一八三八）、二十一歳の時である。この間の事跡で一般に知られる資料は、武知五友「觀山大原先生墓誌銘」の「天保九年始遊江戸、入昌平黌。翌年省生父之病、還松山。後又再入昌平及安積艮齋翁塾。前後在江戸五年。爲昌平黌書生寮舍長、學成而還任府學助教」である。これによれば天保九年以後、江戸遊學は「再」度だったとする。だが觀山の遺稿を精讀するに聊か異なる。「倫齋翁畫卷跋」[11]に、「歳十七始寓于國學、弱冠三遊于幕學。前後殆八年」（狩野本卷一）とあり、三度だったと記すのである。さらに注意すべきは新出の家藏本（文集卷上）で、これには「弱冠以後、遊于幕學者三四、前後殆八年」とあり、「四」を消して「三遊于幕學」と改めている。數え方次第では四度になるとの思いもあったのかと讀める。かつ期間も「五年」ではなく「八年」とより長い。

また觀山の江戸留學に關する公式の記錄も檢證してみよう。まず昌平黌の「書生寮名簿」[12]に「大原晉之介　天保九年五月入、弘化五年正月退　年廿九」と記され、墓誌銘の「省生父之病、還松山」の期間を除き二十一歳から廿九歳までの「前後殆八年」であることが確認できる。さらに書生寮の『弘化丁未以後舍長日記拔抄』[13]には、舍長を務めた觀山自身の日記があり、「大原晉之助　天保九戊戌ヨリ嘉永元戊辰迄十一年」と自ら記す。ここでは「三遊」を通年して「十一年」とする。すなわち觀山の在府活動は、自己認識としては實年以上の重みのあるものとして意識されていたと考えられる。

さらに『安積艮齋門人帳』[14]天保九年戊戌の條を見ると、「松平隱岐守樣御内／八月五日　大原城之助」とある。松平隱岐守とは十二代藩主・勝善のこと。また城之助は、大原家藏「家譜」[15]に、「有恆、初恆（ツネシゲ）成。通稱、大次郎。城之助・晉之助・武右衞門・武門」と列擧され、觀山本人と了解される。この安積艮齋だが、『觀山遺稿』の詩集・文集（以下、「文集」は便宜上『觀山文集』とす）に艮齋の批點が見られるほか、艮齋著『朱學管窺』（寫本）、また「文略序」「松風亭記」等を含む艮

齋の諸作が觀山筆『諸家文錄』一・三に採錄される等、師との強い關係を窺わせる（後述「家書」等を參照）。

貧士觀山にとって江府での勉學など夢のような話だったから、いつも胸には熱い向學心がたぎっていた。同年五月十九日、觀山は松崎慊堂に拜謁する。『慊堂日歷』[16]の「天保九年五月十九日」條に、「大原城之助、松山游學生」と簡略な記錄がある。一方、觀山は「謁松崎慊堂翁」詩で、「老松　怪竹　小蓬山、考槃して恰も塵氛を避くるに好し。賢人　古自り野に遺ること多く、傑士　今に于いて文〔王〕を待たず。一見　縱ひ白眼を成す無きも、千里　底に緣りてか　青雲に附せん。快談　侍坐す　春風の裏、頻りに覺ゆ　滿身に和氣の薫るを」と、この記念すべき日を詠んでいる。さらに舊藏書中には、「山田長政船艦圖記」と表書きされる寫本中（題名は冒頭の作品名。內容は多樣な作品の編修物）、「慊堂松崎先生行述／生鹽谷世弘勤述」（弘化元年十二月甲辰の署名あり）がある。また同『諸家文錄』二（寫本）にも、「松崎慊堂の「藻泉錄序」（跋文に「天保丁酉（八年―補）歲陽月蓋城松崎明復撰」）とある。これらを寫しながら觀山の胸にはありし日の思い出が蘇ったことだろう。觀山『所有書畫控』（家藏）にも、「松崎慊堂翁　明復　半切　壹」の書軸がある。一地方の「游學生」とはいえ、艮齋・慊堂（明復）ら江府の大儒との關係も含めて、その全體像を理解する必要がある。

さて觀山舊藏書に「戊戌夢物語」（寫本、天保戊戌（九年）高野長英著）がある。本書が引き金となって、翌年あの蠻社の獄が起きるが、今注意すべきはこの寫本の「高野長英」が墨で塗りつぶされていることである。筆寫年代は特定できないが、觀山のこの頃の關心の所在を物語るものなのではないか。

江戸での勉學は吸收するものが大きかったが、實父加藤重孝の病を機に省親を藩邸に願い出なければならなくなる。その時の葛藤は狩野本卷三の數篇に窺える（家藏本になし）。それは別の機會に讓るとして、天保十二年辛丑、二十四歲で再び江戸へ。が、天保十四年八月十三日、父逝去（七十歲）のため歸鄕。觀山の名が再び昌平黌資料に見えるのは、『昌平坂學問所日記』[17]弘化四年丁未（一八四七）の條においてである。これが前述の「弱冠三遊于幕學」の三度目の入府となる。

四月廿三日

書生寮舍長役・吉本榮八江被仰付五人扶持被下、大原晉之介・永橋章助江助勤被仰付三人扶持被下。捨藏（佐藤一齋）申渡、謹一郎（古賀茶溪―侗庵の子）立合。

七月十七日

舍長吉本榮八事退役・退寮願出候ニ付、今日如願被仰付、迹役大原晉之介被仰付、晉之介代枝吉平左衞門舍長助被仰付候。捨藏申渡す。

今回は書生寮の助勤、後に舍長就任という職務に與った。周圍の觀山評價のほどが窺える。なお枝吉平左衞門とは枝吉經種（肥前・副島種臣の實兄）であり、『觀山詩集』の批點者の一人でもある。

『同日記』嘉永元年「戊申日歷」は續けて記す[18]。

一月廿五日

書生舍長大原晉之介退寮ニ付、跡役枝吉平左衞門江被仰付、平左衞門跡ハ井內左馬之允江被仰付、捨藏申渡、謹一郎立合。

「捨藏」とはかの佐藤一齋を指す。舍長觀山は、學問所付御儒者一齋（在任期間は天保十二～安政六年）の閒近で勤務していた[19]。具體的な勤務內容も、前揭の『舍長日記拔抄』に觀山本人記として殘っており、

「九月八日　高橋章助母病死ニ付、致下宿忌中歸寮難調候閒、御役御

免退寮仕度旨、佐藤様江願出候…」「十一月九日　内入寮之義、暫見合ニ相成候所、今度佐藤様江奉伺候處、以前之通被差許旨、御達」等、入退寮の状況を監督者一齋に報告するものである。

また觀山の『膾殘錄』には、佐藤一齋との日常的な雑談が二條ほど記錄される。前掲『所有書畫控』にも、「幕府ノ人通稱捨藏　佐藤一齋（中半切）壹」と記される書軸があるが、それも身近な關係にあればこそである。その『膾殘錄』にいう―、

○余、一齋翁（ニ）、皇國偃武以來之文章家ハ何人か第一なるへきと問ふ。人々之意見もあれは如何ニ候へとも、余ハ釋大典第一と被思召といはれし。

○三助先生（古賀精里は彌助、尾藤二洲は良佐、柴野栗山は彦輔）文、いつれかまされると問ふ。尾藤翁勝る由、一齋被答。又曰、人文を見る時、おもしろくもなくをかしくもなき文ハ、必す氣を付て見るへし。必名文なりと被申。

觀山が二洲に學んだ痕跡は、舊藏書の『二洲文抄』（寫本）がよく物語る。例えばその「招月樓記」は、儒と吏事と自然の閑樂の連環的統合を、自然との豊かな交歡を背景に記すが、觀山の「梧桐樓記」（家藏本卷上・狩野本卷二）はその影響だろう。ただ前掲の艮齋「松風亭記」とも發想・構成が似ており併せ考える必要がある。舊藏書中の『明文集選　劉青田』（寫本）は、「安積信選」と明記された劉基の文章の抄本だが（艮齋の編著としては他所に未見）、その中の「松風閣記」とも關連すると思われる（別稿を俟ちたい）。

江府での觀山の學問の様子を窺う一例として、その安積艮齋との關係を見てみたい。艮齋の學問所での儒官在任期間は嘉永三年から文久元年までであり、觀山が昌平黌で受業した譯ではないが、艮齋塾の門人であり、「觀山遺稿」の詩文册ともに艮齋の批點が多く記されることや、前掲『所有書畫控』に「安積艮齋翁　小切」とあり、また既述の『朱學管窺』を舊藏することからも、師弟として密接な關係にあったと思われる。が、從來艮齋の門人としては全く認知されてこなかった。

その例とは「豕書」（漢文、家藏本卷上・狩野本卷三）である。冒頭にいう、「世に傳ふ、豕を畜ふ家には必ず馬の災ひ無しと。故に藩邸に之を畜ふこと數十年、生育すること日に蕃え、遂に百餘頭に至る。司牧する者、給食の繼がざるを恐れ、牡は諸を中邸に置き、牝は則ち諸を上邸に置く。之をして分睽し相偶するを得ざらしむ。是に於いて豕憤然として上書す。其の書に曰く」と。當初余（豕）は邪氣拂いのため飼育されたが、增えすぎたという理由で雌雄別居させられたのを不滿として上書したと起こされる。觀山の篤實な面を見てきた者には戯言的な筆致に戸惑うが、彼の中に社會の深部への鋭利な問題意識も内在したことに注意しなければならない。

以下、要約的に見ていこう。臣豕には麟麒の德はないが、豺狼の暴もない。馬牛の能はないが、狐狸の妖もない。だからこそ舜が深山にあった時も、そのよき友となり得たのだ。舜が帝になるや、饕餮に臣らを食べさせて喜ばせた。以後、臣らの名前は初めて天下に知れ渡った。以來、宗廟の祭や賓客の供にとお役に立ち、崇尊の極みを受けたことは死んでも悔いることはない。しかし、その一方でまた「牝豚」と罵られたり、屈辱を受けることも少なくなく、鬱々として樂しまざる日々が續くこととなった。そこへ「海外に君子の國有り。厚德・深仁にして愛は鳥獸に及ぶ」と仄聞したので、「桴に乘じて海に浮かび相率ゐて」日本にやって來た。當初は大事に扱われ樂しみを味わった

が、數が增大するや人々の態度は怒りに變わり、ついには牝牡の居を別にし、つねに空腹狀態に置かれることとなった。祖國の辱臣ですらここまでの待遇はなかったと。

筆致は辛辣である。さらにいう、萬物の靈長と自負する人間樣が大いに羨ましいと。「穴隙を鑽ち以て相覗き、牆を踰えて以て相從はむ」こともするし、「饑寒の憂い有れば、則ち肩を脅めて諂ひ笑ひ、賄を納れ賂を通じ以て富貴を博す」こともする。ああ、臣もまたそうしてみたいものだ。しかし自分には「隣に覗くべき耦無く、柙に賄ひすべき貯無く」「凡そ腐敗の物、割烹の餘、人の棄てし所と爲す者、僅かに食するを得て以て餘命を保つ」のみと。『孟子』滕文公篇を引いて大陸渡來者の目で、「海外の君子の國」の氣樂な人間樣への諷刺を效かせ、その閉塞狀況を指彈する。

臣らはただ親子ともに暮らせたらそれで十分。「何ぞ必ずしも一妻一妾…美肉精飯ならんや。伏して願ふに、臣の微功を錄し臣の懇志を愍み、牝牡をして再會し、飲食滿腹せしめんことを」と懇願し、最後に「威尊を汙瀆するも、敢へて鄙衷を告ぐこと所謂豕突を免れず。謹んで上書し以て聞す」と、己の猪突ぶりを自嘲する辭で結ばれる。獸性と靈性を兩有し、儀典の一役を擔う「豕」だが、高等な上書を奉獻したり、『孟子』風の議論を展開したりするのは儒者の僞裝であって、じつは「君子の國」に潛む困難について、この國の儒が抱える現況への訴狀なのである。

これに對する家藏本の批點が興味深い。「凡そ文字、事の諧謔に涉ると雖も、然れども必ず世教に關係し復た觀るべきなり。鑽穴隙以下數語、及び父子共麀等語には陰かに世教を害する者有りて、白璧の微瑕として之を恕すと謂ふべからざるに似る」、及び「艮齋先生曰く、遊戯の文辭と雖も亦た意懇ろに情至りて、文の華彩は以て之を藻飾するに足る」である。狩野本では前者の批點は抹消されるが、觀山の胸底を察するに、從來の善導的講說では事態の解決にはならず、「世教」の禁忌を恐れない姿勢が必要との思いがあったのだろう。それは「儒者角抵序」（後述）等にも一貫する、儒學改革への强い欲求として働いていく。伊豫の文人肌の一儒生の〈猪突〉への大變貌だが、それは內包されていた芽が江府の學塾での師友間の切磋の中、高い反應熱を放ちながら成長していったものなのである。

その若者を難局の世が待ち受けていた。やがて松山藩儒となり、幕末の危局に腐心する身となるが、その樣子を一瞥しておくと、舊藏書中に「田安樣自之御續方」「桑名樣之御續方」（寫本）があるように、伊豫松山藩は第九代藩主松平定國が田安宗武の六男、また寬政の改革の松平定信はその七男にあたる。定信は久松松平家の白河藩主の養子となり、後に桑名藩に隱退した。そもそも松山藩の藩祖・松平定勝（家康の異父弟、久松松平家の祖）が封じられた地が桑名藩だった。このような深い「御續」ゆえに、藩はきわめて親幕色が强かった。その藏書中に、前揭の西山拙齋「休否錄抄」（寫本／田沼意次による社會の否塞を定信が休止させたとの意）や、「久松家諸統略系」「久松家譜」等の寫本、また觀山手稿「故從五位菅原［久松］朝臣忠敏公行狀」の草稿が數種ある等というのも、公務に精勤するその人柄をよく物語っている。

ために幕末には心勞を重ね、「人情世態　心と違ひ、啞となり聾と爲りて歲時を送り」（「愛山の隱居を訪ひ寓宿す云々」詩）、「天下の爲に外冦を憂ひ、藩主の爲に遭厄を憂ひ、子弟の爲に廢學を憂ふ。憂ひて已まず鬱悒」（前揭藤野「觀山先生墓表」）たる心境に陷る。が「啻に流涕痛哭し長大息を爲すのみならんや」（後述の「禪讓論」）と、忍辱を以

て後世に望みを繋がんとする。その硬質の氣性は、觀山自筆の朱熹「敬齋箴」や、朱熹の爭友の陳亮『陳龍川文鈔』（寫本、圈點多數）、豪放不羈で知られた明末清初の侯方域の『侯朝宗文雋』（版本、伊豫松山藩儒・宮原煥輯、圈點多數）、「山崎闇齋先生行實」（寫本）、十一代松山藩主定通（定信の甥）が藩士とともに愛讀した淺見絅齋『靖獻遺言』（版本）等々の、紙數の關係でごく一部に止まるが、その藏書に顯著に伺うことができる。

地元では知らぬ者とてない「頑翁」（觀山の別號）の朱子學者だったが、それは東アジアの國家間差もあり思想的宗家の文脈そのままではなく、日本文化の風土や習俗と適應し、宗家との異質性を合理化した、近年黃俊傑のいう[20]「脫脈絡化」し「再脈絡化」された日本版朱子學である。かつ觀山において留意すべきは、その座右にいつも詩文書があったことである。舊藏書を見るに、『諸家名詩集』・朱熹「齋居感興」（ともに觀山筆）、『陸放翁詩鈔』『三家詠物詩』及び數種の自作漢詩集も含めて、世界調和を詠む詩への關心が強い。「微醺談笑すれば宵を徹するも厭かずして、詩を善くす」（前掲武知「墓誌銘」）と稱された人物である。「能く程朱の眞腴（しんゆ）を得るは闇齋に若（し）くは莫し、夫（か）の神道の若（ごと）きは則ち姑く置いて論ぜず」（『膾殘錄』）と記すように崎門派の影響は濃いが、一方闇齋學の枠を越えて和樂する生の全域にわたる世界經驗を、日本の山川草木との樣々な交歡を通して淸福の情景に具象する文人でもあった。

三　砲艦の猛威―埋もれた寫本に見る

さて、伊豫の靑年儒生を大變貌させた根本の要因について述べなければならない。それは西洋の砲艦への强い衝擊だった。觀山舊藏書で驚かされるのは外國事情本の多さである。江戸で見聞した異國物がその藏書の顯著な特色なのである。まず當時の「世界」たるアジア圈の「外國」に關する寫本から拾うに、『五事略』（新井白石著）、『三國通覽略說』（林子平著）、『對禮餘藻』（古賀精里著）、『外蕃通書』（近藤守重編）等は當然ながら有する。注目すべきはアヘン戰爭關連の書で、「粤東義勇檄　皇朝天保十三年壬寅」で始まる寫本一冊である。この中には「按嘗田捐餉團練附述」（金應麟）「局商呈文」（天保十三年十一月　王商元珍）「英冦枉焰將次欲熄、今春以來直至現今、傳聞情節臚列如左」（天保十三年十二月　寅三番船主顧子英、同財副陳逸舟）「蒙」（寅十二月　王公二局船主顧子英、周靄亭）「英夷侵犯海疆、蔓延四載、今夏勢焰大張、疊〻奉」（天保十三年十二月　寅三番船主顧子英、同財副陳逸舟ほか六名）等の記述が見え、觀山が「英冦」のアジア侵攻に强い關心を寄せていたことが確認される。

理想の國日本を目指しての出帆の話は、ベーコンの『新アトランティス』に既にあるが、當時やって來たのは强壓的な異國船ばかりだった。この種の洋威に關する書としては、昌平黌儒官の古賀侗庵の『海防臆測』『俄羅斯紀聞』等や、安積艮齋の『洋外紀略』等が重要だが、觀山も江府の學塾でこの種の書に接する機會があったはずである。今、同種の寫本を若干拾い出してみると、

『海國兵談』（林子平著「大原書」と表書）、『喝蘭新譯地球全圖』（橋本宗吉作）、『鎖國論』（極西・檢夫尒（ケンペル）著）、『訂正增譯采覽異言』（山村才助著）、『環海異聞』（大槻玄澤著）、『西洋列國史略』（佐藤信淵著）、『船長日記抄』（池田寬親著）等々。

特に觀山の西洋事情物の貴重な一點に、魯西亞（ロシア）關連史料の寫本「觀火錄[21]」がある。これはロシア皇帝の特使レザーノフが通商を希望した

ものの、幕府の拒否に會ったためそれを強要する手段として、文化三年以後、蝦夷地の襲撃を行った事件に關する報告書である。觀山のこの種の情報の入手先だが、外交文書の管理機關でもあった昌平黌や、對ロシア外交の窓口の長崎經由等の諸説が推測されるが未特定である。觀山の「觀火錄」を、幕末外交史の基礎資料『通航一覽』[23]卷二八四～三〇六「蝦夷地亂妨始末」の各條と照合するに、少なからず異同が見られるのは、それが風説混じりの傳寫のためである。また舊藏書中、ロシア物を寫した別册として、「魯西亞退帆風説」「魯西亞船渡來ニ付乘船御禮有之」の二編（觀山筆寫本、合册）、『文化子魯西亞船記』『文化寅卯魯西亞船記』（ともに家藏、寫本）もある。このようなロシア事情の熱心な抄寫と相俟って、『環海異聞』『船長日記』等の讀書もあったと考えられる（後述）。

西洋への開港騒動をどうにか凌いできた幕府だが、弘化三年丙午（一八四六、觀山二十九歳）、米のビットル艦隊が浦賀に入港し通商條約を求めた邊りから震撼・衝迫狀態に陥る。それはこの一儒生をも直撃する事件となった。今「觀山遺稿　詩」（家藏、『蕉鹿窩遺稿』草稿）に、抹消線を引いた一首がある。それを判讀するに「弘化丙午夏洋船至浦河、府下騃洶記感」と讀める。先に觀山の入府は弘化四年四月に昌平黌に入寮するのを以て三度と述べたが、その準備もあってか、一年前にも入府していたとすると四度となる。實態は不明だが、今は「洋船至浦河」という現實により、觀山が「府下」の「騃洶（ききょう）」（激しい騒亂）に衝撃を覺えた詩を詠んでいることに注目したい。その詩にいう、「自ら笑ふ　迂儒　俠氣餘り、慨然として劍を撫して蒼旻を睥（にら）む」（七律）と。手ぬるい「迂儒」など叩き捨て、〈猪突〉の野性を鼓舞し蒼天をにらんで劍を撫すのだった。

さらに浦賀事件については、「大原書」と表書きした一寫本がある。「弘化三丙午年閏五月二七日異國船浦賀江着岸ノ略記」と題され、「〇北亞米利加州ノ内「ハチトン」他國ニハ「ボストン」ト云ナリ」の後、以下のように記される（適宜句讀點と説明を補う）。

「大船號ユムリユムヒユス」

船體の情況（長さと幅、水入・水ノ上高サ、中檣三拾五間貳分、艪同・表同の長さ等）、「艀大小九艘、人數八百人。將官姓ユーム（ママ）ス＝名ヒツケン、年七十歳。副將姓タムス。名ウイソン、年三十歳。外壹人ノ副將姓名不分病氣ノヨシ。其外士官兵卒役ノ水夫トモ有之。大砲八十六挺。但シ左右三段ノ備。内ボンヘン六拾四挺、鉛玉、目分量凡ソ八貫目「ロドンドル」仕掛ナリ。小筒八百挺、鉛玉目分量凡八匁位。短筒劍者、壹人壹丁ヅヽ、素鑓百本ナリ」（以下「小船號ウリンセンス」の記述は略す）

これに對應する文書は、幕末外交史の基礎資料『大日本維新史料』[24]の弘化三年閏五月二十七日の〈米艦浦賀ニ來航ス〉の［浦賀奉行屆書］（第一編ノ一、七六〇頁）、［續通信全覽］〇弘化三年閏五月（同七七二頁）、及び［浦賀附通詞ヨリ聞書］（浦賀譯官森山某ヨリ承リ書留ノ傳寫（同七七四頁）になるが、この三者に比して觀山寫本は全體を總合した内容で、メモ風の體裁も分かりやすい。また三者にない記述（ボンヘン、鉛玉、目分量、ロドンドル、短筒劍、素鑓等）もある。情報の入手に當たっては、觀山自身相當奔走したのではないか。

以下、弘化三年の諸事件が長々と續く。まず「御請書」という一條が付され、「風順次第早々出帆仕候間、此段御請奉申上候　以上」とあり、早期出港の要望書が筆寫される（『大日本維新史料』第一編ノ二、五一頁。「米國水師提督書翰」に相當、文面やや異なる）。「願書」（同第一編

ノ一、七六七〜七六九頁の［米國艦隊司令官書翰］○浦賀奉行宛、［米國水師提督ビッドル書翰］○閏五月二十七日幕府宛、及び［聞見錄］に相當するが、文面少しく異なる)、「異國船江移下物左之通」(同第一編ノ二、五〇頁に相當、品名はほぼ同じだが配列が大きく異なる)、「近國諸家人數出張」(同五五頁〈幕府沿海警備ノ部署ヲ定ム〉に相當、やや異なる)、「弘化三、八月武傅雨卿與所司代役亭江御行向、如左御達」(同六三三頁〈海防敕書ヲ賜ハル〉の［御沙汰書］とほぼ同一)、「弘化三丙午六月長崎江異船拂郎西之書付」(同八三〜一〇八頁〈佛艦長崎ニ渡來ス〉の「佛國水師提督書翰和譯」各種、「長崎通詞林由郎屆書」「和蘭通詞上申書」等に相當、異同多し)。以下中略するが、「弘化三年丙午七月、大阪表御倉屋敷浦より廻狀之由」(同二八六頁〈英船琉球ニ渡航ス〉の「鹿兒島藩大阪藩邸留守居屆書」にほぼ同じ)で止となる。

觀山にとって弘化三年がいかに衝撃的な年だったかをよく物語っている。この種の抜萃風編集物の體裁だが、前掲の伺庵『俄羅斯紀聞』と同類[25]なのも時代性を表すものといえる。

米艦の動向に關するまとまった寫本としてもう一例掲げれば、「嘉永癸丑阿米幹船渡來一件聞書」(「大原書」と表書)がある。嘉永六年六月三日のペリー來航に關するものだが、これも『大日本古文書』(幕末外國關係文書之一[26]、五三〜七六頁「六月　浦賀奉行支配組與力等よりの聞書　米船浦賀渡來一件」)とは若干異なる。

安政元年、松山藩は幕命により現在の品川・大田區邊を、同四年には神奈川一帶の海邊警護を擔い、勝海舟の協力を得て神奈川砲臺を建造する立場だったから[27]、觀山の情報收集は藩にとって極めて重要なものだったと思われる。

四『觀山文集』―唐宋八家文の遺響

「府下」での衝撃的な體驗が、觀山をして「西夷」の本質を熟慮させ、『觀山文集』(漢文、約百篇)に深い陰翳を刻印するのは必然だった。まず海防に關わる危機意識より書かれた「環海異聞序」(狩野本卷二、家藏本卷下)を見てみよう。その本文たる『環海異聞』(文化四年、大槻玄澤編)は、仙臺藩の船員らがロシア領に漂着、各地をめぐり國王に謁見し歸國するまでの顚末記錄である。これを讀んだ觀山曰く、「蘭學者の翻譯に於いては、大抵は天文・地理に非ずんば、則ち醫術・工藝にして、風俗政刑の若きは、則ち十に其の一に居るのみ。蓋し予の固陋なるに、寡聞にして未だ之を見るに及ばざる歟。抑其の用心の異なるや、夫れ天文は民時を授けるに過ぎず、地理は形勢を知るに過ぎず。而して醫術・工藝も素より疾病を療し、事用に適するのみ。其の術爲るや、縱ひ諸蠻夷の書を讀まずと雖も、尙ほ以て其の事を了すべし」と。

これまでの西洋事情本は科學技術や工藝がほとんどで、わが國にも類するものがあるが、肝心の「風俗・政刑」に關するものは一割程度しかなく、一體どのような風俗をもち、どのような統治がなされているのかと思案する。西洋社會の實態を懸念する觀山の胸中を測度するに、このような蠻行の擧に出る社會とは、東洋の儒教的世界、例えば前掲の二洲「招月樓記」に說くような、儒學と政治と自然の統合による宋學的世界秩序に代わり、どのような規範秩序を有しているのかという懷疑だろう。蘭學者は『環海異聞』が遍歷地も廣く傳聞も多いがゆえに、これを補輯しより詳細なものをと腐心したが、觀山は彼らの「風俗・政刑」に關わる紹介こそ喫緊の課題だとする。がこの方面の

書は科學技術・地理・紀行書等より遅れ、魏源『海國圖志』（和刻本は嘉永七年版が最初）、西周訓點の『萬國公法』（慶應元年）等の登場を待たねばならなかった。後世徐々に明瞭になってくるこの新來の外國事情だが、觀山はその西洋社會の問題因子を折に觸れて豫感する。「異聞序」はいう、「今は蘭學の用、其の功の已に佛に過ぐれば、則ち予の恐るるは其の害の更に佛者より甚だしき有るを。其の用の用法も亦た以て察せざるべからざるなり」と。今に蘭學受容の弊害は佛教を凌駕するようになるのではないか。そして「其の害、…其の用の用法」への憂慮は、彼の著作に幾度も吐露されるようになる。

次に、「送〔擬〕船頭某序」（狩野本卷二、家藏本卷下、〔擬〕は後者）においては、洋兵の上陸侵寇に備えて東海の海防の必要性が強調される。なお舊藏書に『船長日記抄』があるが（カナダ・アラスカ方面から擇捉・國後を經て歸國した尾張の船頭重吉の體驗談）、「送船頭某序」とは直接關係しない。ただ本「日記」で得た知識も含めて、觀山の海防意識を理解しておく必要があろう。

觀山曰く、「吾が俗は陸戰に長じ、水戰に短なり。而して西洋は則ち是に反す。若し之と戰ひ有らば、則ち吾の長ずる所固より用ふべきも、短ずる所も亦た未だ必ずしも廢すべからざるなり。何となれば、彼の東西貿易は海を視ること殆ど平地の如し」と。海洋活動を得意とする西洋だが、我々も海を賴みとすべきである。我々の險阻とすべきもまた海なのだと。ここでも觀山は激越である。この記述は觀山舊藏の賴山陽『通議』（寫本、穀堂古賀先生評）[28]「水戰」との類似性も當然あるが、むしろ藏書にない古賀侗庵『海防臆測』卷上の「目次」第四「水軍は彼の長ずる所、陸師は我の長ずる所。當に我の長ずるを用ひて以て彼の短に敵すべし云々」との酷似に留意したい。觀山が侗庵の海防論を意識していた形跡があるからである。

「夫れ彼の來たるや、果たして上陸せんや、我は吾が長ずる所を用ひ、而して圍みて以て之を鏖（みなごろし）とすべきなり。掩ひて以て之を殲（つ）くすべきなり」（「鏖」は家藏本に從う。狩野本は「塵」）。「鏖」にして上陸阻止をとはこれまた甚だ過激だが、やはり侗庵の同書本文の「邦人は悍鷙（し）にして、義を重んじ生を輕んじ、尤も刀槍に熟す。彼の來たるや、之を海上に逆（むか）へ、以て得る所を逞しくせしむべからず。其の岸に上る所を俟ちて、然る後に電發鏖戰（おうせん）し、立ちまち韲粉（せいふん）を爲さしむべし」を踏まえたものではないか。『觀山文集』に散見する侗庵のこの影だが、侗庵らの開港論に對する疑念が、觀山の胸底に膨らんできたことに起因するように思われる。

そして觀山は提言する。海防のため吾が藩國の船頭は、歸路は陸路を取らずに東海の海路を取り、有事の際に備えるべしと。實際、舊藏書に「品川―浦賀―小田原」から東海に續く海圖の卷物があるが（寫本）、この提言と關わるものではないか。また『兵要錄』（長沼澹齋の祕法の兵學書、嘉永七年刊）も所藏するが、攻擊に主眼を置く本書の特色を活かして上陸阻止に利用せんとしたのだろう。

さらに觀山は、天保七年丙申（一八三六）、天保八年丁酉の物價高について、「平物價策」（狩野本卷二、家藏本卷下）を著す。そして今日の狀況は不公平な交易に發する歪みだと分析し、かつ曰く、「今其の以て然る所以の者を察するに、其の害に三有り。曰く奢侈なり、惡弊なり、開港なりと。而して開港の害を最大と爲す」と。「開港の害」とは、すなわち「海外に流入（ママ）する者、紀すに勝（た）ふべからず。其れ彼に取る者は、乃ち無用の長物にして民生日用の物は、大いに乏絶するが若し。是に於いて物價は益（ますます）貴く、未開港の前よりも其の更に幾倍な

るかを知らざるなり」と。「無用の長物」ばかりが入り、「民生日用の物」が流出して「大いに乏絶する」という結果を招いたのである。

加えて貨幣の問題もあった。金銀の流出が甚だしく、やむを得ず洋銀を溶かして鑄造すると益々物價が逆騰した。「法制の未だ立たざるに、（貨幣の）海外に闌出して卒に紀極の有る莫し。…銅錢既に然り、金銀又安んぞ海外に闌出する無きを知らんや」と。問題は粗悪な洋銀による詐取的行爲にあると喝破する。さらに曰く、「開港の後、彼は陽に悪銀を以て我に輸し、陰に我が三幣を奪ふ。是れ以て金銀の幣の益乏しく、銅弊亦た減ること幾分なるかを知らず。是に於いて洋銀を銷かし他物を雜へ、以て新幣を鑄造す。而して物價は日に益貴し。天保の金の若きは則ち其れ精なるも、大いに慶長・享保の兩幣に若かず。而して諸幣に比して其の値は三倍に過ぐ。則ち新幣の至粗至悪は、固より論を須たず。而して物價の益踴騰を致すは怪しむに足らざるなり」と。かくして「開港を禁じて後、奢侈を抑へ悪弊を改むれば、則ち物價は以て平らぐを得べきなり」と、鎖港以外に方策はないと斷ずる。

これらの國防・財政論は、「先生夙に外寇を以て憂ひとなし、務めて心を外事に盡くせり」（前掲「觀山先生墓表」）や、「文章經濟倶に實用を期す」（田中參「蕉鹿窩記」）と稱された觀山の著述姿勢を端的に物語る。それは源了圓等が構築してきた西洋文化との接觸により促された幕末期の實學思想の一端でもある。ただ『觀山文集』の全體は、「風俗・政刑」論と連結したより文儒的な、すなわち朱子のいう「當世の用」的經世論調の強いものとなっている。

今、文久二年（一八六二、觀山四十五歳）の作に、「噬嗑卦」（狩野本卷二、家藏本卷下）がある。易卦を借りての時事論で程頤『易程傳』を引き、「天下に在りては則ち强梗、或いは讒邪有りて其の間を間隔すと爲し、故に天下の事合するを得ざるなり。當に刑法を用ふること小なるは則ち懲戒、大なるは則ち誅戮、以て之を除去すべし。然る後に天下の治の成るを得たり」と述べた上で、「噬嗑卦」を當世に適用し、「洋夷」に起因する弊害をこう解釋する。「今者は洋夷の跋扈し、吾が治化を間つるは年として茲有り。物價は踴騰し農商は食に艱しみ、東西に防戍して將卒は奔命に疲れ、其の害を爲すこと、豈に特に强梗の其の間に間隔するのみならんや」と。「洋夷」がわが國の「噬嗑」、すなわち口に物がはさまったような障害物となっているのだという。かくして「悪は極まり罪は大なり。乃ち今日の洋威是れなり」との指彈に至り、西洋への疑念は心の奥底にまで深く盤踞するようになる。

結びにいう、「嗚呼、聖人の易を千載の上に作りて、諸を今日に徵するに位置として吻合せざる無し。其の故は何ぞや。蓋し一定不易なる者の理なり。…理に從へば則ち善にして吉、理に逆らへば則ち悪にして凶。易中に吉兆を言ふ者は、皆此くの若し」と。道理にもとる行爲は、誰であれ最後は必ず凶に終わる。ここに觀山は『易』を借りて、人間の道義性を人類的視野へと架け渡して問おうとする。

富貴の物力や國家の武力より德義こそ人類の高貴な力である―、これが彼の文集を貫く核である。「王覇辨」（家藏本卷上／狩野本ナシ）に曰く、「天下の事に似て非なる者有り。辨ぜざるべからず、覇者是なり。蓋し覇者の行事は、王者の道に似て其の用心は同じからざるなり。同じからざるは如何。誠と僞とのみ。夫れ天の君を立つるや、私一人をして之を富貴にするに非ずして、將に其れ斯の民俾を涵育し、各其の所を得さしむるなり。故に王者の治は天下の至公にして毫末の私も無く、唯だ民を安んずること是れ務めとす。是を以て仁義禮樂の政有

り」と。この覇者＝僞論には、觀山の思想的土壤を考慮すると「洋夷」への連想もあったのではないか。

また「儒者〔家〕角抵序〔序ナシ〕」（狩野本卷二／家藏本卷下、〔　〕は後者）に曰く、「國郡里邑は儒の名家なる者を以て比々たること皆是なり。而して其の業最も熟し、名最も隆き者は、則ち國君封侯も相競ひて之を延禮せざる無し。而して徒に其の講を聽き徒に其の文を誦し、未だ嘗て實に道を求むる心有るを聞かず。而して儒者亦た徒らに其の俸祿に榮え其の玉帛を利するも、亦た能く道を以て之を輔くる者有る莫し」と。世は儒者を名聲如何で遇し、儒者また本來の「道」の探究に精進せず、いわば伺候者にすぎぬという。「此れ其の用を盡くさざるに由ると雖も、其の古道を以て自ら處らざるに由るなり。歎くに勝ふべけんや。此れ由り之を觀るに今の儒者は徒に其の名のみ有りて其の實無し。彼の角抵と一場の觀を供するに、太だしくは逕庭莫からん」と。儒の本義を忘れた儒者は、君侯の前で供される「角抵」のごとき技藝者だと慨嘆する。

「公潔說」（家藏本ナシ／狩野本卷二）は官吏論で、曰く「國家の事は官に於いて人を得しむるに先んずるは莫し。官吏の人を得ざれば、則ち制度・文章の備はると雖も、適に以て國事の擾はしきを增すに足るのみ。…公や何ぞ私する無き謂なり。潔や何ぞ汙れざる謂なり。其れ人に待するや、公にして無私なれば、則ち好惡の以て其の明を昧くする能はず」と、無私で公潔たる清官の公益性を强調。幕末期の樣々な社會矛盾や混亂と向き合う中で、明察されてきた吏道の要諦をいう。

最後に「禪讓論」（家藏本卷下／狩野本卷一）を取り上げる。「世は湯武の放伐の權を爲すを知るも、堯舜の禪讓の權を爲すを知らず」と起こして、「湯武は天命を奉じ天誅を致し、民を塗炭の中より救ひて、固より毫も天下を利するに非ざる」ゆえに、「天命歸し人心興り、已むを得ずして遂に大位に升る」と。しかし、「堯は是を以て天下を舜に讓り、舜も是を以て天下を禹に讓るは、亦た已むを得ざるに出づ」るものであれば、湯武の放伐と同樣應變の措置という意味においては、「堯舜の禪讓も亦た權なり」だという。

この政權交代論は、江戸思想史にあっては孟子の放伐論をめぐる林羅山「對幕府問」に始まり、仁齋「王覇論」と闇齋「湯武革命論」らの正反對の主張へと分岐し、幕末になって例の沸騰を來す、思想史界のアポリアである。[29] これに對し觀山は、むしろ「禪讓」論を取り上げていう。この考えは思いつきではない。「余は〈禪讓は權道なりの說〉を持すること久し」と。近頃人情は薄れ世道も頽廢し、「廢立」「共和」等と輕々にものを言うようになった。そういう人間は誅伐もできるが、中には婦女子が劇場の芝居を見てきたかのように話す者もおり、それを聽く者がまた怪しまずにいる。これでは「天理民彝」も地に墜ちてしまう。ただ泣いてため息をつくだけではどうしようもない。そこでこの論を作り、「兒孫」に示そうと思うと。

「禪讓」に擬裝された「權道」を批判するこの文脈は、古賀侗庵「禪代論」[30]の堯舜流の禪讓も爭臣の簒奪の一契機となるというのを踏まえるかもしれない。ここにおいて觀山は、激動の世とはいえ道義忘るべからずの戒を「兒孫」に庭訓として殘したのだった。ここでも注意すべきは、侗庵の影がまとわりついていることだ。この「共和」だが、前田勉氏いわく、これを「中國古代の理想的な堯舜の治と等しいものと高く評價する先鞭をつけたのは、古賀侗庵だった」[31]と。すなわち侗庵曰く「西洋意大里亞等の國、古より皆歐邏巴州に就き、賢者を遴選し、立てて以て君と爲す。然して禍亂作らず、簒奪萌さず。斯れ其の美、

之を堯舜に比ぶるも多く讓らず」（「殷鑑論」二）、また師艮齋曰く、「近世の北亞墨利加は、地益ます闢け人益ます殖え、國勢强盛にして西洋の官吏を逐ふ。…世に共和政事國を稱する者、三十一なり」（『洋外紀略』「同引」）と。そして同「話聖東傳」には、「奇才英略、必ずしも華夏ならず。明智敏識、必ずしも讀書ならず。吾乃ち今九州の外、吾經の外を知るに、復た自ずから人有るなり。話聖東は庶幾んど之に近し」[32]と。

これまで幾度か言及した侗庵の影だが、艮齋の右論と併せてこれらの先哲の唱えた西洋の共和制＝善美論への疑義が、深い學恩と同居してその胸底にあったことを物語る。觀山の諸作を熟讀するに、『闢邪小言』『陳龍川文鈔』序を書いたあの大橋訥庵ほどの過激さではないが、それに類する辛辣な西洋論がベースとなっている。今、兩者の直接的關係はまだ見えないが[33]、美風に見える他面で武力を重用するという擬態性をそこに照見し、畢竟「禍亂・簒奪」（前掲「殷鑑論」）へと至る「覇者の行事」（前掲「王覇辨」）との思いがあったように見受けられる。觀山の長篇詩「牛を椎つ行」は、「人力に代はり…日々役役たる」牛を、「之を殺して食と爲す」文化に對し、「只恐る　將來人の相食まんことを」と詠み、未來の人類が殺戮し合う悲劇を鋭く直感する。この洞察を外孫子規は强い印象を以て「高見」[34]と稱えた。總ずるに『觀山文集』の大きな特色は、洋威という武力に屈しての「開港」に强い懸念を抱き、當時實學的論調の活發化する世風にあって、その中でもより文儒色の强い載道主義的經世論として展開したものといえる。

『諸儒文錄』四（觀山筆）には、賴山陽「續八大家讀本序」の（眉欄に書込多數）、「況んや夫れ是非を辨じ利害を別け、之を言ふに簡明、之を傳ふるに不謬なる者においてをや。漢文の用、寧んぞ廢すべけん哉。夫れ文は漢より善きは莫し。漢人皆善く之を用ふ。而して八家其の最も善き者なり」が寫される。また侗庵「讀書矩」の（寫本）「○八大家文鈔　文を學ばんと欲する者は、當に讀みて三四過すべし」には朱丸が付されている。物事を載道主義を以て問い、道義的普遍に至らんとするその文法に學んだ觀山の「漢文の用」は、まさに八大家の遺響[35]をなすものといえよう。

以上、我々は日本の一地方の藩儒の舊藏書の悉皆調査を通して、「洋夷」の砲艦の衝迫により根底から搖さぶられた儒學的世界觀という大命題を、思想的宗國の援護もなく、かつ「脫・再脈絡化」（黃俊傑）した異株の學問ながらも、正論的思考へと牽引する漢籍の文脈を用い、世界的道義に押し廣げて問うた一儒の朱子學的「當世の用」の實踐を、時間を卷き戻して再現することができるのである。

おわりに

觀山の友人曰く、「之を文章に著して以て來世に傳へんこと亦た知るべきなり」（前掲「蕉鹿窩記」）と。子息の加藤拓川（恆忠）は漢學に造詣が深く、先考の詩集は自ら編纂し『蕉鹿窩遺稿』にまとめたが、文集は殘念ながら自身の重篤な病もあり家藏のままに止まった。だがある部分、この文集の反西洋主義をめぐり世論を慮った面もあったのではないか。かつて拓川はフランス公使館勤務の前後（一八八五～六）、「人倫忠恕の天性に背きて敵味方と名乘り、同類相喰の業あらば、たとへ今日愛國の譽を得るも、後世識者の笑とならざるべきか。…實にや愛國主義の發動はとかくに盜賊主義と化して外國の怨を招き、外國の怨は人類總體の怨となるゆへ、人間世界に此心あらんかぎり、天下太平は望みがたし（『拓川集』「愛國論緒論」）と記した。一九〇六年、

ベルギー公使の時には日露戰爭後の人道的處置をめぐるジュネーブでの赤十字會議全權委員として出席し、伊藤博文の外交姿勢と衝突して本省を辭し、その晩年には軍備撤廢論を唱えるに至った[36]。それは父君の遺訓を相傳した如くであり、その硬骨漢ぶりも親讓りの「豕突」に思える。「敬齋箴」そのものの如く謹直の一儒だった觀山。その感化が拓川は無論のこと松山藩（市）民に廣く及んだことは周知の所である。

「强梗・讒邪」（「噬嗑卦」）の魔手より國を死守せんとするも叶わず、觀山その詩に曰く、「世情時事　年を逐ひて更まり、一木支へ難し大厦の傾けるを」（慶應の「遇題」詩）と。かくして世は洋儒兼學へまた洋學主義へと雪崩をうって轉回し、儒學的「王者の治」（「王覇辨」）も、「海外に君子の國有り。厚德・深仁にして愛は鳥獸に及ぶ」（「豕書」）話も夢と化していった。「海内多事、外夷强梁」な中、「義を唱へ…節に死し…從容として義に就」（明治二年作「永井雲翁の畫ける所の靖獻遺言の八忠臣圖に題す」）いた八臣のごとく、愚直に「西夷を厭忌し」時代の變革を拒み、「世人以て頑冥と爲[37]」すとの世評を、生涯一儒の矜持を以て呑み込み、「鬱悒として終は」った（「觀山先生墓表」）。苦境を支えたのは、「自ら笑ふ　生來　寂寞に甘んじて、官を愛するは山を愛する情に若かざるを」（明治の作「管下に至る口占」）という思いだった。『蕉鹿窩遺稿』を讀むに、「厚德・深仁」の由って來たる天地山川に隨順し、身心を回路とする折々の小康的風情をわが栖とする美學が底層を貫いている。彼にとって人間存在は世界の中心ではなく、自然世界の萬物調和の理に融和するものとしてあったのである。

載道的美風に殉じた儒士大原觀山。その存念は西洋のまた近代自身の擬態性を擊つ一面を持つ。ゆえに西洋的路線への裁斷を下した人々に對し、單純にその先進性を唱道できない本質的痛點のあることを示唆する。また儒學を前近代的舊弊として脱亜論を說いた洋學禮讃の言說の中に、近代社會の物質文明の翳を逆說的に見出させてもくれる。觀山からすれば、堯舜にも劣らぬ「共和」の世はまだ見ぬ世界だった。幕末の西洋理解に大きく門戸を開いた横井小楠だが、晩年の「沼山閑話[38]」（慶應元年）に至り、「天守教の如きは西洋も本意とする事に非ず」「西洋の學は事實上の學（實學の意）にて、心德上の學に非ず」と失望したことを思う時、觀山の「頑冥」は單なる時代遲れというに止まらないと改めて氣づかされる。孫の子規が「翁は一藩の儒宗にして人の尊敬する所たり」（明治二十二年「筆まかせ」）と述べたように、觀山は一地方の儒士にすぎなかったが、硬玉のごとく身體化した師道を以て敬愛される人物でもあった。地味な存在ゆえの障壁はあるが、見方を變えれば長らく時の歩みを保留したままの稀な事例ともいえる。今、世の中がこの種の喪われた「心德」を再認識する中、一點一點調査しながらの足取りにはなるけれども、將來廣く公開できるよう作業を進めていきたい。

注

（1）拙著『『子規全集』未收錄・自筆漢詩拔萃寫本―『隨錄詩集』等翻刻・解題』（科研報告書　二〇一六）

（2）『蕉鹿窩遺稿』（大原觀山撰、加藤恆忠編　一九二三）。計二六八首。その復刻本が『大原觀山遺稿』（愛媛文學叢書刊行會　一九八二）。今回新たに大原家より『觀山遺稿』（加藤拓川編『蕉鹿窩遺稿』の草稿）、及び『蕉鹿窩抄錄原本』が見つかった。

（3）『觀山遺稿　詩』（表に「寫　廿一歲ヨリ東都留學中作」と朱書、「三

百九十首」と墨書す)、『二月五日天岸氏持參ノ御遺稿』『感興詩・敬齋箴・來格說　合卷』『朱子感興詩』の四種。『二月〜』は松山の友人天岸靜里所有の觀山の遺作。合卷本は、朱熹「感興詩」「敬齋箴」と、三宅尚齋「祭祀來格說」を一冊に綴じたもの(寫本、觀山筆)。最後は「感興詩」單獨で一冊(寫本、觀山筆)としたもの。したがって後の二種は觀山の著作ではない。

(4) 長櫃四棹分、各約五十點。寄託後、子規博により「大原家資料目錄」ⅠⅡが假作成されている(未公開)。

(5) 三種の表書きは「原本　自十五六歲至十九歲」「寫　十五六才ヨリ十九才迄　三百五十首」「原本　少年作」とあり各々異なる。

(6) 「梅花次茶山翁韻」は「原本」無し、「寫」本・「少年作」有り。テキストは「原本」→「寫」→「少年作」の過程が想定される。

(7) [然れば則ち〜]は、狩野本では明教館の師・日下陶溪の批により削除する。家藏本『觀山遺稿文』卷下(上下二卷/なお上卷に「少壯之稿」、下卷に「中年以後ノ作多シ」と表書される)。狩野文庫本『觀山文集』卷一所收。後者が前者の淨書本である。

(8) 「原本」に無し、「寫」本・「少年作」には有り、同一表現。

(9) 『膾殘錄』は觀山の自筆稿本(子規博藏寄託本)による。この復刻本が『手鑑・膾殘錄』(伊豫史談會編　一九八九)である。

(10) 石丸和雄「宇津木靜區の遊歷と九霞樓　七」(『伊豫史談』二三七　一九八〇)に言及がある。

(11) 「倫齋翁書卷跋」は、家藏本『觀山遺稿　文』卷下、狩野文庫本『觀山文集』卷一、及び『蕉鹿窩遺稿』にも所收。

(12) 東大史料編纂所・懷德堂文庫・都立中央圖書館等に寫本が存する。この翻刻に、梅溪昇「懷德堂本「昌平黌書生寮姓名錄」」(『懷德』四二　懷德堂記念會　一九七二)、關山邦宏(研究代表者)『「書生寮姓名簿」「登門錄」翻刻ならびに索引』(科研費報告書　一九九九)がある。後者は都立中央圖書館本。なお懷德堂本の翻字では、「大原留之介」とするが「晉」であろう。

(13) 關山邦宏『昌平坂學問所書生寮「弘化丁未以後舍長日記拔抄」の翻刻』(『國府臺』十　二〇〇〇)

(14) 複製及び翻刻本(安積艮齋顯彰會　二〇〇七)

(15) 『拓川集』(拾遺篇)「加藤家系圖」(拓川會　一九三三)

(16) 『松崎慊堂全集』「附日歷下」(冬至社　一九八八)

(17)(18) 『昌平坂學問所日記』二(斯文會二〇〇二)、三(二〇〇六)

(19) 高瀨代次郎『佐藤一齋と其門人』(一九二二、一九七四復刻　大衆書房)に、當時觀山の資料は未發見だったから言及はない。

(20) 黃俊傑『東アジア思想交流史』(岩波書店　二〇一三)

(21) 岩下哲典「正岡子規の祖父、松山藩士大原觀山の西洋事情研究について」「同、伊豫松山藩士大原觀山筆「觀火錄」の研究」上・中(『應用言語學研究』一四・一六・一七　二〇一二・一四・一五)は、本史料の解說。「嘉永癸丑阿米幹船渡來一件聞書」についても、右の「西洋事情研究」論文に略說がある。

(22) 藤田覺『近世後期政治史と對外關係』(東京大學出版會　二〇〇五)「近世後期の情報と政治」に風聞の流布に關する論がある。

(23) 『通航一覽』全八卷(國書刊行會　一九一二〜三)。なおこの方面の專著に、田中正弘『近代日本と幕末外交文書編纂の研究』(思文閣出版　一九九八)、眞壁仁『德川後期の學問と政治—昌平坂學問所儒者と幕末外交變容』(名古屋大學出版會　二〇〇七)、及び藤田前揭書等がある。

(24) 第一編ノ一・二(維新史料編纂事務局　一九三八〜九)

(25) 小澤榮一「古賀侗庵のロシア研究」(同氏著『近代日本史學史の研究　幕末編』所收　吉川弘文館　一九六六)

(26) 「幕末外國關係文書之一」（東京帝國大學　一九一〇）

(27) 『神奈川砲臺關係史料』（横濱市立圖書館藏　出版年不明）

(28) 昌平黌で舍長を務めていた時の儒官・古賀謹一郎（侗庵の子）の伯父穀堂の評を付したもの。寫本末尾に「天保壬戌夏寫於愛宕□邸」と墨書されるが、天保に「戊戌」はないから「壬戌」と誤記した可能性が考えられる。とすると天保九年の筆寫かと推定される。『通議』の最初の版本は天保十一年だが、大原本とは編集及び注釋者が異なる。大原本卷三末の「論內廷」は、版本では卷二に收められる。じつは「論內廷」は、山陽の死の四日前、すなわち天保三年九月十九日の脫稿である。それが卷三末に配されるということは、この篇が『通議』中、最後の執筆であることをそのまま反映したものではないか。また注釋も、版本には篠崎小竹のほか、穀堂評を見て筆を執った岩國藩學問所養老館の儒員・玉乃九華のものがあり、大原本が穀堂評のみであるのとは別種である。

(29) 野口武彦『王道と革命の間―日本思想と孟子問題』（筑摩書房　一九八六）の「湯武放伐のアポリア」。

(30) 『侗庵初集』卷六所收（國立國會圖書館藏）

(31) 前田勉『近世日本の儒學と兵學』「古賀侗庵の世界認識」（ぺりかん社　一九九六）。侗庵「殷鑑論」のこの指摘も本書を參照。なお拙論の「殷鑑論」は國會圖書館藏に據る。

(32) 前田『江戸後期の思想空間』「國學者の西洋認識」（ぺりかん社　二〇〇九）。拙論の『洋外紀略』は國會圖書館藏。前田氏の引用は東京學藝大附屬圖書館藏のもので、文字にやや異同がある。なお横井小楠『國是三論』「國富論」にもこれと同樣に、「華盛頓（ワシントン）」を堯舜に比肩する人物とし、米國は「凡地球上善美と稱する者は悉く取」るとする言及がある（代表的な研究書に、源了圓『横井小楠研究』藤原書店　二〇一三）。現在、筆者の調査では觀山との接點を見出していない。

(33) 大橋訥庵の『闢邪小言』の冒頭にいう「近世ハ西洋ノ學ト云モノ盛ニ天下ニ行ハレテ、人ノ貴賤トナク地ノ都鄙トナク拂郎察ノ、英吉利ノ、魯西亞ノ、共和政治ノト言ヒ噪ギテ、我モ我モト其學ヲ始メ云々」との關連だが、觀山舊藏書に『陳龍川文鈔』があるけれども、これは訥庵序の付いた同書名の版本とは全くの別本。作品の採錄から見て、觀山は『龍川文集』等をもとに、自ら『文鈔』を編んだものと推測される。二人は佐藤一齋の門人同士になるが、「幕末の儒流（の）多くは、此（『闢邪小言』）のやうな意見を抱持してゐた」（景浦稚桃『伊豫文化史の研究』三四八頁　一九五四）との見方もあり、現在、詳しい調べはついていない。

(34) 子規自筆「隨錄詩集」第一編（法政大學子規文庫藏）に本詩を掲げた後の識語にいう、「翁と世と合はずして、西夷を厭忌すること糞土の如し。世人以て頑冥と爲す。…今之を思ふに及んで、則ち大いに服する所有り。翁の高見たるや、此の詩の結末二句の如し。今日の世界と相距てること實に幾許ぞ、噫」（原漢文）と。

(35) 山本嘉孝「唐宋古文の幕末・明治」（前田雅之他編『幕末明治―移行期の思想と文化』所收　勉誠出版　二〇一六）に掲げる人脈に觀山も加えらるべきである。

(36) 成澤榮壽『伊藤博文を激怒させた硬骨の外交官加藤拓川』（高文研　二〇一二）に詳しい。

(37) 注（34）に同じ。

(38) 『小楠遺稿』（民友社　一八八九）所收。

附記　小稿を成すに際し、淺見洋二氏と吉田公平先生のご助言を得ました。ここに深く感謝申し上げます。なお小稿は文科省支援事業「近代日本の「知」の形成と漢學」（二松學舍大學）の成果の一部である。